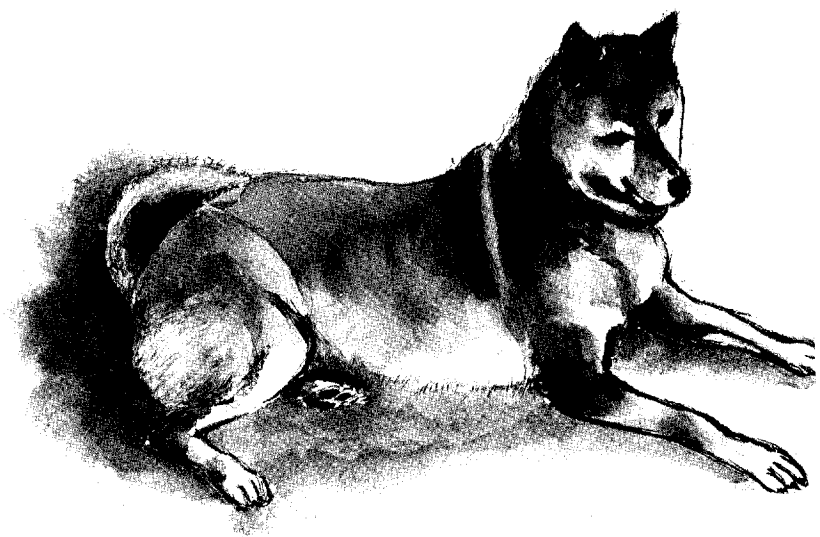


季刊 連句 第12号



南柏雑記 (10).....	1
耳からの連句.....	草問時彦..... 2
連句の読み方・味わい方 (四).....	東明雅..... 5
—「木のもとに」の巻—	
牛耳伝 (5).....	杉内徒司..... 10
歌仙 風花.....	宮坂静生 捌..... 12
気遅れせずに運座へどうぞ.....	馬場東夷..... 14
二十韻 柚子.....	式田和子..... 16
誹諧武玉川のこと.....	杉江杉亭..... 18
絶頂の城.....	20
第十五回猫蓑会 二十韻 六席..... 22	
初日.....	副島久美子...22
一の糸.....	大窪 瑞枝...22
迎へる年.....	杉江 杉亭...24
初懐紙.....	杉内 徒司...22
初雀.....	市野沢弘子...24
蘭玉.....	雑賀 遊...24
二十韻 季題配置表.....	26
雁帛往来.....	29
連句会案内.....	29

表紙 (柴犬) 宮崎 龍火子

信大連句会の憶い出

南柏雑記 10

雅

目を閉じると、信州大学文学部の中庭が臉にうかぶ。ちょうど四月の下旬頃は、そこにあった海棠の巨木（直径一尺はあったろう。惜しいことに校舎移転で切られたが）が、花をたわわにつけ、赤鷗や河原鷗がせっせと雛を育てていた。信州の春は梅・桃・杏・桜がほとんど一斉にひらくが、この海棠ほどすばらしい木はなかった。この花の下の文学部部長室に芦丈先生をお招きして、信大連句会は月例会をひらいていた。

信大連句会が発足したのが三十六年だったから、まだまだ呑気な時期だった。私は悪い癖があって、人にすぐ仇名を付ける。そして嫌われる。嫌われるのを知っても付けざるを得ない。一種の業みたいなものだろう。信大連句会で最もよい仇名をもったのは細田高夷さんで「花の高夷」と呼ばれた。花の名句を数々作ったからである。それに対して月の名句を作ったのが望月紫見さんで、これは文字通

り「月の紫見」だった。そのあたりまではよかった。付けられた本人も悪い気持がするわけがない。むしろ私は感謝されていたのではないかと思う。田淵芹川さんは「春雨の芹川」と呼ばれた。これもいかにもたおやかな芹川さんの人柄を反映して、我ながらよい仇名を付けたものと思っっている。だが、そのあとがいけなかった。藤森雪溪さんという古いホトトギス派の俳人は、第一回からのベテランであったが、花鳥諷詠・写生一本のホトトギスと連句では勝手がいささか違ったらしく、芦丈先生は彼の句をなかなか取ってくれなかった。すると彼は長椅子に不貞寝をして、カバンのチャックをあけたりしめたりしながら、「わしゃもう帰る」と言い出す。それを小出きよみさんや藤松素香さんがなだめ、すかして、出句させる。芦丈先生も気の毒だったと見えて時々採用された。そしてそれが治定すると、途端に喜色満面になって、今「帰る」と言ったのはどこへやらの憎めぬ人柄で、「鎌鼬の雪溪」と言われていた。珍しい鎌鼬の句を作ったからである。（「夏の日」一二五頁参照）。後には自分の句が治定されると、「カマイタチのセツケー」と名乗るようになったのはおかしかったが、今もあの、「俳句で煮ノめたような顔」がしのばれて懐かしい。

耳からの連句

草間時彦

友人の英文学者の話を聞いて面白かった。彼は連句のうまい人である。それが、欧州で、レンクをした。外人の詩人が三、四人集まって、英語のレンクを書いたのである。どういうメカニズムか判らないが、要するに、五・七・五の英語の短詩を書き、それに、別の人が七・七の短詩を付けるということだったらしい。それで、ともかくも、三十六句の一卷が書き上った。そのあとで、参加者の一人が感想を述べたそうである。

「便所をしているところを、見られているような気分だった。」

日本の英文学者氏は驚いて、どうしてだと尋ねたら、「詩を書くということは、孤独な作業である。詩は密室で、一人で書くべきだ。それが、他人の前で、人に待たれながら書くというのは、恥づかしくてならなかった」という話である。

この話を聞いたあとで、私は考えた。俳句は座の文学という。連句は更に座の密度が濃いと考えなければならぬ。座の一人として、同席の者を待たせて、句作するのは当たり前のことと思って、疑ったことはない。それが詩を書くのは孤独の作業と言われてみると、そういう見方もあ

から古い葉書を探す。ときには、一枚ぐらい失われていく。それがいやで、文音はお断りしているだけなのである。

文音連句の一つの欠点は、声を出して読む機会が乏しいということである。耳から入らずに、眼から入るといふことだ。つまり、日本語の文脈の尊さを見失う危険があるということである。

上をきの干菜きまわ刻もうはの空
馬に出ぬ日は内まで恋する

野坡 芭蕉

「炭俵」の「多びす講」の巻である。ウの音を重ねているところに注目したい。偶然なのか、それとも、意識して、ウを重ねたのかそれは判らない。しかし、声に出さなければ気が付かず終ってしまうかも知れない。

わたくしは、ときどき、芭蕉の連句を声を出して読むことがある。ときには、それを、テープに入れて、再生して、自分の声を自分で聞いてみる。日本語の美しさ、それも、日常語の美しさをしみじみと感じる。なかなかたのしいものである。

はきごころよきめりやすの足袋
に付けた去来

凡兆 去来

などは、前の句をやや高く、軽く読んで、去来の句を低音で、咬やくように読むと、去来の面白さがよく判る。

茴香の実を吹落す夕嵐
につづく、

去来

ったのかと、改めて、考えざるを得なかった。

話は別になるが、このごろは文音の連句が多いようだ。連句年鑑の作品、武翁賞の作品、どれにも、文音連句が多かった。何故なのであろう。「連句は一日がかり」が、物理的に無理になって来たということが、理由と考えられる。実際にそうだろうと思う。

文音の連句の作句は孤独な作業なのか、それとも、座での作詩なのか。作者の深層心理の裡に、孤独な作業を求めているものがあるのではないか。顔を合せての作詩を厭う気持があるのではないだろうか。

そこまで言うのは、意地悪であるし、考え過ぎであることはよく判っているが、あの英文学者の話を聞いて、ふと思っただけである。

私自身について言うならば、文音は好きでない。今、能代の佐々木左木翁と取り交しているが、「俳星」主宰の九十翁から乞われたので、長寿にあやかりたいと、お受けした。文音が好きでないというのは、単純な理由があるのだ。歌仙なら、三十六枚の葉書と控を手許に保存しなければならぬ。そういう事務能力が、私にないということだけである。向うから葉書が来るたびに、机の上の紙屑の山

僧ややさむく寺へかへるか
凡兆

は低く、ゆっくりと読むべきであろう。そして、ゆっくりと間を置いて、言葉の調子を少し変えて、

さる引の猿と世を經る秋の月
芭蕉

と読むと「この二句別に立たる格也」という三冊子の言葉が判るような気がする。

芭蕉を読むのはたのしいが、自分の連句を声に出して読むことも必要である。自分が読んでもよいし、座の者の他の人が読んでもよい。耳を通して、聞くことである。聞いて、何かの違和感があったら、それを逃さずに、追求してみるのだ。どこかが、間違っているのだから。

連句の朗読の試みが出来ないだろうかと思うことがある。例えば、

「隣をかりて車引こむ」を男の声で読む。「うき人を積敷垣よりくぐらせむ」「いまや別れの刀さし出す」「せはしげに櫛でかしらをかきちらし」はどうしても、女性の声である。「うき人を」は最初、男性が読んで、次に、もう一度、女性が読むのも面白いかも知れない。「おもひ切たる死ぐるひ見よ」これは男性が高らかに読まなければならぬ。「青天に有明月の朝ぼらけ」は群読である。

こういう試みしてもよいのではあるまいか。これは「猿蓑」を例としてみたが、自分達の現代連句で、こういうことをしてみたら、又、別の面白さが生れるかも知れない。

私は先日、木下順二さんの「子午線の祀り」という平家

物語を舞台とした朗読劇を観ながら、そういうことを考えていた。この芝居は三度上演され、三度ともに見ているが、そのたびに、感動している。この戯曲は日本語の美しさを追求したものと解している。その点、「平家物語」は朗読に適した文芸で、もともと、そういうように書かれているのである。

連句の場合、「平家物語」のような具合にはいかない。朗読によって、どこまで、効果を出すことが出来るか。どこまで、人の耳に入っていくことが可能なのであろうか。連句のなから、日本語の美しさを捉えることが出来るのであろうか。ことに、現代連句の場合、それが出来るものかどうか。

このことは、試行錯誤を重ねなければ、いけないと思う。試行錯誤を重ねているうちに、現代連句が見失ったものを、見付け出すことが出来るかも知れない。現代連句が見失ったものは何か。いくつもあるだろうが、そのひとつに日本語の美しさを意識することがある。そして、句が続いて行くところに、文脈の美しさが生れて来ないと嘘だ。

例えば、口語的発想の口語の付句を、新カナで書くか、歴史的カナづかいで書くか、私はいつも迷う。歌仙三十六句のうちに、文語的発想の句と口語的発想の句が入り乱れている。それが連句の面白さなのだが、表の上では文語と口語の入り乱れであり、そうすると、表記はどうなるのであろう。殊に、カタカナの西洋語の入

連句の読み方・味わい方 (四)

——「木のもとに」の巻——

東 明雅

手束弓紀の関守が頭に
酒ではげたる頭成覧

(現代語訳) 紀の関守が頑固そうに、手束弓を突き立てて威張っているが、あの禿頭はきつと酒で禿げたのだらう
(付心) 会釈。前句の関守の肉体的欠陥である禿頭に目をつけて揶揄した句。人情他の句。

(付味) 頑な関守に「酒ではげたる頭成覧」と付けたのは移りでありひびきである。

(補説) 赤人の名はつかれたり初霞 史邦
鳥も囀る合点なるべし 去来

この付合を思い出すような気分のよい句である。裏の折端あたりからじめじめした気分の句が続いたので曲水がわざとユーモラスな句を出して、気分を一転したものである。ここではもう「熊野をみたい」と泣かれる北の方の姿は消え、意地悪そうな関守への庶民の感性が浮きぼりされている。このようなお上の御用をかさに来た小役人の姿とそれに対する民衆の感情が生々しく描かれていておもしろい。

酒ではげたる頭成覧 水

た付句を歴史的カナづかいで書くと、どうも、違和感が残る。と言って、そこだけ了新カナで書いたとしたら、これも奇妙なものであろう。

表記の問題は現代連句ばかりでなく、現代俳句でも、触れることはタブーとなっているようだ。結論が出し難いからであって、無理はないと思うが、と言って、なおざりにすることもよろしくあるまい。結局は作家の美意識の問題だと思っている。

私は俳句が出来ないときに、「平家物語」を声に出して読むことがある。楽しいことも楽しいが、それと同時に、韻文感覚が身の裡に蘇って来るのである。昔の文語体の聖書。これもよい。そういうことを重ねているうちに、連句を声を出して読むことに気付いたのである。連句を口から耳へ伝えることには、まだまだ、新しい可能性が存在するように思う。

それは、連句をサロン文芸であると考えたとき、一卷が巻き上ったときに、もう一度、その一卷をたのしむことがあってもよいのではないだろうかということだ。昔の宗匠は連句を儀式化した。

あの精神を、別の形で現代に生かすことが出来ないものだろうか。サロンの交歓のたのしさと、現代連句とを結び付けることは出来ないものであろうか。文音の多い現代連句は、エネルギーを喪失する恐れがある。座の文学としての連句の座を、現代に生かすことを夢想しているのである。(六一・一一二)

双六の目をのぞくまで暮れかゝり 翁

(現代語訳) もう暮れかかって来たのに、懸命に双六の目をのぞきこんでいる親仁の頭は酒で禿げたのだらう。

(付心) 其人の付け。双六をやっているのだから人情自他半の句である。

(付味) 翁は頭の禿げた男を関守から双六打ちに見立替えているが、さほど不自然ではない。酒好きから賭事好きへの移りもよい。そのことは「三冊子」に「気味の句也。終日、雙六に長ずる情を以て酒にはげぬべき人の気味を付けたる也」これは前句の人の風趣を詠んだ句である。一日中双六に熱中する性情を詠むことよって、酒のため頭も禿げてしまったような人物の趣きを付けたのである。逆付と言い、付句から前句へと逆に解すると意が通ずる付方。

(補説) 宮本三郎氏はこの句を前句の「其人」の付けと見ると、打越から三句同一人となるとしておられるが、この句は前に述べたように自他半として、その中の一人と見ればよいのである。即ち、打越は関守だったが、その関守が双六に熱中するのではなく、一生を酒や双六に費した老人を描いた自他半の句である。このあたり、庶民的な句が

多く、軽みがでている。

双六の目をのぞくまで暮れかゝり
飯の持仏にむかふ念仏
頌 頌

(現代語訳) 旅回りの双六打ちの老人が暮れかかって来たので、泊り先の仏壇を飯のわが仏壇として念仏を唱えている。

(付心) 其人の付け。人情自の句。双六打ちを遊び好きの老人から、旅回りの職業的な双六打ちに見かえている。「冬の日」(はつ雪の巻)にある、「朝月夜双六うちの旅ねして」の境涯にある人であろう。

(付味) 前句の「暮れかゝり」が付句の「念仏」の気分に移っている。

(補説) 「飯の持仏」とは何か、諸説があるが、持仏は持仏堂の意で仏壇であろう。

中村俊定氏は「前の遊び人に対して信心深い人に向わせた付」即ち向い付と見ておられる。いかにも打越から同一の双六打ちが念仏を唱えているとすると三句同境が続くが、さきのように双六打ちを途中で見立変えしているのでその難はない。

また、阿部氏が指摘されているように、この句は「持仏」「念仏」と繰り返しているところ、また、珍碩は初表五句目にも「月待て飯の内裏の司召」という同じような飯という表現を使っているところが気にかかる。このような例は俳諧の実作の場では、時々現われる現象であるが、一つには満尾した上での推敲が足りなかったのであろう。庶

っている。

(付心) 其人の付。人情自の句。「飯の持仏にむかふ念仏」「中／＼に土間に居れば蚤もなし」がそれぞれ人情自の句であったのにもう一句人情自の句を続けると、人情自が三句並んで具合が悪いのであるが、さきに、「羅に日をいとほるゝ御かたち」が人情他、「熊野見たきと泣き給ひけり」が人情他、「手束弓紀の関守が頑に」が人情他と、人情他が三句続いた例もあり、その時言ったように芭蕉の自他の考えはまだ、付方自他伝で示されたようにきびしいものではなかったので、ここも許されるだろう。しかし、同じ人情自の三句でも、何とか変化をつけようと苦勞してるところは分かる。

(付味) 「土間で暮らす」と「なぶりもの」が位の付である。しかし、同じ土間で暮らす人も、打越では修業僧らしい趣があり、この付句では一切を放下して、名声などにこだわらぬ大愚の人の感じがして、それが変化である。

(補説) 同じ前句につきながら、打越の珍碩の句がごたごたしていたのにくらべ、流石に芭蕉の句はすっきりとして、また内容豊富である。これらが力柄の差というべきであらうか。芭蕉は乞食の境涯にあこがれていたというが、これもその気分がある。一方で言えば、述懐の句である。名残の表の末に述懐の句を出すことは場としては適切であるが、「双六の目をのぞくまで暮れかかり」あたりから貧しい寂しい気分の句が続いているのでこのあたりでは気分を一転して欲しかった。

民的にはなっているが、何か力の足りぬ個所である。

飯の持仏にむかふ念仏
中／＼に土間に居れば蚤もなし
頌 頌

(現代語訳) 板も張ってない土間で暮らす方が、蚤も出ないので却って快適である。そこに据えてある飯の持仏堂に向って念仏を唱えるだけの生活である。

(付心) 其人の付。有心の付。人情自の句。

(付味) 「飯の持仏」と「土間に居れば蚤もなし」は位の付けである。仏壇なども特別に設けてない世捨人の生活とその人の気持ちを描いているが「蚤もなし」は「蚤」に代表される憂世のいろいろな煩わしいことを放下し気持だろが、「中／＼に」というところにまだ十分に悟りきれぬところがあって、それがまた、かえって人間的な弱さが見えておもしろい。

(補説) この土間の読み方「ツチマ」「ドマ」の両方の説があるが、私は露伴や阿部正美氏の説に従って、「ツチマ」の説を取りたい。「ツチマ」は「家の中で、床が張ってない地面のままの所」で、要するに「ドマ」と同じであるが、元禄時代の諸書に出ている。「ツチマ」と読むと「居れば」は「オレバ」となり「ドマにスワレバ」とよむより、生活の実態がよくわかるのである。蚤で夏の句。

中／＼に土間に居れば蚤もなし
水 頌

(現代語訳) 掘立小屋の土間に寝て蚤が居ないなど言っている自分はこの里での愚か者として村中の慰みものとな

我名は里のなぶりもの也
憎まれていらぬ躍の肝を煎り
頌 頌

(現代語訳) 村中で馬鹿にされている男が、余計な盆躍の世話をしては、人に迷惑がられ、憎まれている。

(付心) 「前句ノ自ヲ他ヨリソシタル附」(晚台秘注)の言う通りである。人情他の句。躍で秋。

(付味) これも位の付である。村中で馬鹿にされながら、それを何とも思わず、一所懸命に骨折って盆踊りの世話をするが、そのため、ますます人気がおとし、憎まれるのである。前句の「なぶりもの」から、付句の「憎まれて」は近すぎる程の付味ながら、そのあとが、「いらぬ躍の肝を煎り」というちょっととぼけた理由がくっついてるので余裕が出ておもしろい。

(補説) 盆踊りは村の若者たちに取って最大の娯楽であり、性の解放の意味もあるので、いい年寄が出しゃばると、男女両方から嫌われる事になりかねない。そんなことも分らないから、嫌われ、憎まれるのも当然である。

ここは名残の表の月の定座であるが、珍碩は月をごぼしている。これは前句が「我が名は里のなぶりもの也」と特に人情の濃い句であり、その「なぶりもの」たる所以を打越とはまた異なる理由でおもしろく説明するために、月を出す余裕がなかったのだから。また、この巻、月はすべて秋季で出しているところから、ここでこぼして変化をはかったところもあったかも知れない。

憎まれていらぬ躍の肝を煎り
頌 頌

月夜／＼に明け渡る月

水

(現代語訳) 村中から陰では憎まれつつ盆躍りの世話をしているうちに、月夜も重なって夜明けまで月が残るころとなってしまった。

(付心) 通句、天相の付け。人情なしの句。

(付味) 前句の「肝を煎り」が「月夜／＼に」にひびいている。盆の十三日あたりから七月の下句まで続く盆躍りのため、いろいろなことで気を揉み、それを人からは迷惑がられている男の姿がよく窺われる。

(補説) 打越の人情自でじめじめした気分が、一挙に人情なしでからりとした句に転し、これで名残の表二句目から十句も続いた人情葛藤の句がきっぱりと断ちぎられた。しかもこの一句、「月夜／＼に明け渡る月」とは、毎夜毎夜、夜つびでの躍りに夢中になっている姿と、それが済んで空に残った白けきった月の色をも連想させて、技巧なしのようで大いに技巧のある句である。

ここで名残の表十二句をふり返ってみると、折立の翁の名句(何よりも蝶の現ぞ……)は別として、21・22・23・24のうち、24ははっきり他の会釈だから許せるとしても21・22・23は言い訳のしようのない他の句が三句続いている。それに対し、26・27・28は自の句が三句続き、ともに後世の眼から見れば疵になるところだろう。また20・21・22の三句の転じが不十分なのに対して、25・26・27・28はまた気分が変わっていない。しかも人情の句が十句も続いている、すこしごたごたし過ぎ、やっとな折端になってすっきり

した気分になった裏の変転自在の鮮かさに比べると、落ちると言わざるを得ない。

月夜／＼に明け渡る月

水

翁

(現代語訳) 月の夜が重なってもう有明の頃となったが、尾花もまたあまり風に靡いたあげく、すっかり穂先が枯れ果ててしまった。

(付心) 其場の付。明け渡る月の下の風景を描いたまでの句で、人情無しの場の句である。秋の句

(付味) 人情の句が十句あまりも続いたあと、前句でやっと場の句が出たが、これでまた人情の句を付けると、うるさくなるので、もう一句人情なしを付ける。これを伸ばす句法と言う。晝台が「月ニ芒ノ移リハ更ニシテ、月夜々ニト重ネタル詞ヲ、余リ招ケバトヒビカセテ、晩秋ノ淋敷ニ移タリ」(秘注)とあるが、それとともに、「明け渡る月」と、「うら枯れて」の白々とした気分も移り合っている。

(補説) 打越は人から憎まれている男、これは花薄であり、全く人情のない句で、その点でも変化は付けられ、転じは十分であるが伊藤正雄氏が「芭蕉連句全解」で言っておられる通り、この花薄には擬人的な艶な哀れさがあり、単なる叙景の句ではない点に、打越からの気分の転じがさらに感じられる。岡崎義恵氏は「続芭蕉俳諧研究」の中で、この句にふれ、「此句にはさういふをかしさとあはれさとの二面が含まれてゐて、その一面だけを感じることも

できるが、又複雑な味のこもも襲ってくるものと受取る事も出来る。かういふ味を持つてゐるところが芭蕉一流の表現法でせう。前句とは、景色としてもそれに伴ふ情趣としても、一つになります。又、前句も此句も共に時間的の推移を含み、かれは月の運命を、これは薄の運命を歌っております。さういふ感情でも互に照応してゐると言へませう。

後略」と言っておられるのは同感である。

花薄あまりまねけばうら枯れて

翁

碩

唯四方なる草庵の露
(現代語訳) 尾花も秋風に靡いたあまりうら枯れてしまった、その野末にある草庵の四辺にもただ露がびっしりと置いてある。

(付心) 露と薄とは付合(類船集)。花薄のうら枯れた野末にある草庵を描いている。もちろん草庵には人は住んでいないだろうがそのことは表面には出ていないから、其場の付けであり、人情無しの場の句である。秋の句。

(付味) この付句は人情無しの句であるが、「付合考」で魚潜が述べているように、この庵に住む鴨長明みたいな、世捨人の俤が偲ばれるのは事実である。だから、露はその世捨人の露命をも思わせ、寂寞無常の気分が移り合っている。

(補説) 前句の花薄の句をはさんで、打越が月、付句が露では気分の転じは不十分である。しかも、打越・前句・付句と三句とも人情無しである。尤も21・22・23が三句続きの人情他、26・27・28が三句続きの人情自だったから、

人情無しが30・31・32と三句続いても不思議ではないが、秋の句は踊・月・花薄・露と近いものを四句も続けていゝ。これが転じの不十分な一因であろう。
太田水穂は「芭蕉連句の根本解説」でこの草庵に住む人を「遊女の果てとも云ひたげな尼そぎの姿であろう」と想像している。前句の「招く花薄」からの連想であろう。そのような想像も面白いが、この句を「恋の呼び出し」とまで見るのは行き過ぎであろう。
また、山田孝雄博士の「俳諧語談」によると「四方」は「ヨハウ」と読み、四角な、方形のと言う意味で、いわゆる方丈の庵の意と言う。しかし五句前に「土間に居れば」とやはり居所の説明がある。差合はないものの近すぎる感がして賛成できない。

連句入門

中公新書508号 価五〇〇円

芭蕉の恋句

岩波新書 91号 価三二〇円

猫蓑

永田書房 価二三〇円

著 雅 明 東

好色五人女

小学館 価一九〇円

牛耳傳 (5)

杉内徒司

九

牛耳の墓が富士宮市の大石寺にあるのは、長女いづみさんの感化で晩年創価学会へ入信されたからだそうだ。一周忌には牛耳門で墓参の計画もあったが、「加舎白雄全集」上梓祝賀会(五十年五月十一日)の準備に追われ実現しなかった。そこで目黒白金の八芳園で追善俳諧を行うこととした。

八芳園のオーナー長谷敏司は牛耳と同郷の人、牛耳と同じく志をたてて上京、庖丁一本で大料亭の経営者となった敏司は、その波瀾にとんだ一代記の執筆を同郷の花形作家に依頼した事がある。

ある宵、牛耳が照れくさそうに私にくださった「野村愛正先生句碑建立趣意」が今も手許にある。それには次のように書かれている。

郷土の作家野村愛正先生は、今日尚、矍鑠として永い創作活動を背景とされ、我国文壇の大奏として、特に近年は連句の世界に日本の権威を以て臨んでお出になりま

すことは、郷党挙げて敬仰を捧げるところであります。先生は東京在住、株式会社八芳園社長長谷敏司の御案内により、昭和三十九年五月佐治村にお見えになり、県境辰巳峠を御訪ねいただきました際、お残り下さいました句(花柄や国境の道百折す)を碑として県境峠の地に碑を建て、先生の偉業を記念し合せて郷土の山川に花を添えようとするものであります。

鳥取県佐治村観光協会

建碑除幕式 次第

日時 昭和四十五年十月九日 午前十時

場所 鳥取・岡山県境辰巳峠 現場

第一回牛耳忌会場を八芳園としたのは右のような機縁からである。

一周忌の行事を相談した折、私が「俳諧師の法事には、むかしは霊前に追善文集を供へたもんだよ」と云った。すると、わだとしおが、それなら、我々も遺稿集を出そうと云い出し、それから僅か一カ月ぐらいで牛耳指導の全作品を集め「摩天楼」をつくりあげて仕舞った。

生前牛耳は義仲寺連句会の作品に自信をもたれ、その出

版を企画された。書名を「摩天楼」として、二、三の出版社にも御自身で接渉されたが実現しなかった。

さて、その「摩天楼」の一節「牛耳野村愛正略伝」(石川宏作作制)の「大正六年」には次のように誌されている。

大正六年(二十六歳) 応募作品「明ゆく路」を五月三十一日締切りぎりに投稿す。十二月十三日、一等入選発表さる。応募総数二百十一篇、次席との差僅か一点であった。審査員は内田魯庵(当初、夏目漱石の旨発表されたが、同氏がこの間伊豆にて発病のため交替)、幸田露伴、島崎藤村で、当選及び次点作品に対する各選者の採点は次のごとし。

題目 作者 魯庵 露伴 藤村 平均

明ゆく路 (野村 愛正) 九〇 八五 七一 八二

宿命(次点) (沖野岩三郎) 九九 八三 六三 八一

七月五日の当日、この日のために香港から帰国されたいづみさんから中国産印材を二十四組提供された。この御好意には大変感謝したが、四十五名の出席者にどう渡すかの気配りに苦労した。プログラムが少し進み、講談社の重役だった西村俊成氏は、「野村先生と講談社」と題して、戦前のある時代は、社内では、少年ものは佐藤紅緑、大人ものは野村愛正でした、とかつての華やかな流行作家ぶりを話された。作家の知切光蔵氏は、白井喬二との中学時代からの交友ぶりや、牛耳は万事に凝る人で、若い時は釣に凝り、晩年は連句に凝ったエピソードを披露された。

そんな話が進行していると、受付に、井上という人がみ

えているという。知らない人なので受付へ行ってみると、鳥取大学の井上順理教授であった。井上氏が校長を兼ねている付属中学校へ生前の牛耳から蔵書を寄贈していただいたので、お礼の意味で出席したという。

郷里関係でもう一人、牛耳の小学校の二年下だったという太田隆三が、今年十一月三日郷里国府町に「野村愛正文学碑」が建てられるというニュースを伝えてくれた。

連句関係では、石川宏作が義仲寺連句会の現況を話し、東明雅は「摩天楼」作品の寸評をされる。この寸評は簡にして要を得ていたので、求められて、この翌八月の「曼荼羅」第六号に載せた。同号には中谷孝雄が次のように書いている。『谷崎潤一郎の「細雪」を読み阪神地方の洪水のことを書いた部分に来て、ふと突然、以前にも誰かの小説で洪水のことを書いたのを読んだことのあるのを思い出し

た。そして時を置かずその小説が野村さんの「明ゆく路」であったことに気づいて我ながら驚いたことであった。あの小説には、たしか鳥取地方の洪水のことが書かれていたが、そこから受けた少年の日の感動にくらべるなら、谷崎の洪水の描写などは生まぬくて、とても読み続けられそうにもなかった。』

これらの回想談のあと、牛耳の発句で五連句を巻いた。ところで、今度「武翁賞」のため雅印が必要となったので、雅友吉沢たかしに、あの日頂いた印材に彫っていただき、この正月、武翁、牛耳との忘れがたき御交誼を偲びつつ、武翁賞の賞状四枚にこの雅印を捺した。

氣遅れせずに運座へどうぞ

—初心の方々のための覚書—

馬場 東 夷

連句に関心を示しながら門前でためらったり、また門を敲いてみたもののぐらついている方々のために、御参考になればと筆を執ってみました。

連句の基本精神は「和を以て貴しとなす」であり、方法論は「一步も後に帰る心なし」であります。以上のことを弁えていただければ、連衆として安心して座にお着きになれるのです。運座にあって氣遅れしない為に、二三の心得を述べてみましょう。

一 俳句短歌にこだわらない

連句は五七五の長句に七七の短句を付けることから始まるので、運座に着くには俳句や短歌の嗜みがなくてはと心配なさる方もありますが、心配は御無用です。連句と俳句短歌は別物と思つてよろしいのです。例えば、昨年ア

サヒグラフの増刊号として、「俳句の時代」、「俳句の世界」の二冊が刊行されましたが、居並ぶ先生方が一堂に会して、連句作品一卷を巻いたという話はずいぞ耳にしませんし、連句に無関心だからといって、現代俳人に恥になることでもありません。連句をやると俳句が下手になりますと澄ましていて、一向に構わない訳です。現代歌人が連句の本家である連歌を巻いたという話も聞いたことがありません。俳諧師の名刺はいただきましたが、連歌師の名刺をいただく機会はなさそうです。

連句を始めて一年も経てば、宗匠先輩を従えて捌く機会もあります。俳句結社短歌結社で主宰に代つて選に当たりたいと言ひ出したら、どういうことになりましょう。気が触れたと思われ、結社から追ひ出されるのが精々でしょう。俳句であれ、短歌であれ、現代詩であれ、漢詩であれ

表現の勉強のために何にでも手を染めることは大いに結構ですが、五七五のリズムを心地良く感じられるだけで連句を始めるのには充分です。

二 法則にこだわらない

連句には面倒な約束(式目)があつて、憶えられるだろうかと心配なさる方もあります。芭蕉が「一步も後に帰る心なし」と言つているように、連句は前へ進んで変化してゆくものであり、式目はその為にあると思つていただければ良いのです。「三句目の転じ」が連句の本質です。A句とB句とで一つの世界を作り、B句にC句を付けてまったく別の世界を作り出すのです。A句とC句(これを打越と言ひます)とは無関係でなくてはならないのです。後は捌という指揮者にまかせて、少しづつ憶えてください。「自他場」を耳にしても、じたばたしないことです。歌仙でも二十韻でも一巻の進行で大事なことは序破急です。一巻全体の調和のためです。碎いて言えば、「始めチヨロチヨロ中パッパ、あとは熾火むらし」という手順です。

三 七部集にこだわらない

芭蕉の七部集にくらべると現代連句は卑俗であると嫌味を言うひともありますが、氣にしないことです。こうゆうひとは御自身の俳句と芭蕉の発句とくらべることは決してなさらない。志は高いに越したことはないにしろ、入門早々に芭蕉と才を競うというのは無茶です。七部集はしほら

く置いて、現代連句は現代生活の長短句からなる絵巻です。現代をしっかりと見詰めることです。現代世界、現代生活が連句の題材ですから、好奇心のアンテナを八方にめぐらし、頭脳に絶えず新鮮な空気を送りこみましょう。卑俗なのは現代であつて、連衆ではありません。

四 付合にこだわらない

連句は権勢欲も金銭欲も満たすものでもなく、個人の功名心をくすぐるものでもなく、連衆が創作と享受を繰り返す共同制作の文芸ですから、その運座の興趣が生命で、その楽しさは他に代えられません。他人様の句を引き立て、自分の句を他人様に引き立てられるといったお互いに協調してゆく姿勢が第一です。連句は「和を以て貴しとなす」所以です。芭蕉は「文台引下るせば、すなわち反古也」と言つたそうですが、これは運座の興趣が連句の生命故、作品一巻が成せば、記録されたものは反古にも等しいという意味になりましょうが、私にはこの言葉が記録された作品が座の楽しさを充分に伝え切れないもどかしさから生れたような気がするので、それ故、座の楽しさを充分感得してから、七部集を手にとつて遅くはないのです。まずは氣遅れせずに座に着いてください。

「季刊連句」のバックナンバーより揃えてありますので御希望の向きは発行所へ御申込み下さい。

二十韻 柚子

柚子の黄に午後の光や冬温し
文音往来は開かねど
古九谷の徳利の音のよろしくて
渡り鳥ゆく空の彼方に

正江 明雅 和子 隆秀

西鶴忌喜寿となりたる月の人
餌を口うつし秋の猫抱き
アトリエに裸婦横たわせ油彩塗る
連れて蓮見に誘ふ朝焼け
無縁坂曲りて司法研修所
男十八無精髭のび

雅 江 子 秀 江 雅

二十韻で遊べば

私ども、福井隆秀、秋元正江、式田和子三人のつたない「文音往来」が上梓されましたので、御指導いただいた明雅先生に第一号を献呈させていただくため、打揃って南柏へ参上致しました。

温々のお部屋で、隆秀さんが、ご自分の小説「近所合壁」をまた地でいくようなお話をなさり、残った地境には柚子の木だけが亭々と育っている由、お気の毒やらおかしいやら。早速正江さんが、

柚子の黄に午後の光や冬温し

明雅先生が「文音往来」で脇をつけて下さいました。奥様お心尽しの御酒は、金と緑の古九谷の徳利で、首の処がきゅつと締っていて、つぐ時トクトクトクとまことに良い音が致しますので、和子早速それを第三に戴きました。隆秀さんが軽く四句目。

裏に入りました、

餌を口うつし秋の猫抱き

正江

これは竹久夢二、隆秀さんは油絵の具でこつてり塗りたいとおっしゃる。せっかく横たわらせた裸婦をそのままでは悪うございましょう、連れて蓮見に誘わなくてはと和子。危い処を正江さんが、道をあやまらず、司法研修所へ曲らせて下さり、男十八、無精髭ものびると、先生がピン

小錦と琴天太せぬチャンコ番

ワープロ打って小説を書く

夾竹桃昏れても蒼き海の色

和金蘭鑄ゆらぎある月

常盤津の年増師匠にちらと惚れ

恋の手ほどき悪い女に

財界のお目付け役選ばれぬ

東郷神社しるき箒目

人の世にはらはらと花散りかかる

二日灸して実年の女

子 秀 江 子 雅 子 江 雅 子 秀 江 雅

昭和六十年十一月二十六日首尾
於 南柏 東 明雅 居

連衆

秋元正江
東 明雅
式田和子
福井隆秀
東 明声

と決めて下さいました。

名残の表に入って、男臭く順列敵しい相撲の世界でも、外人にはちと特別。そんな浮世の綾が小説の世界かも知れません。夾竹桃の濃い緑がサワサワとゆれ、蒼い海の色がだんだん深くなる頃、その辺りの数寄屋造りのお宅では、和金蘭鑄が静かにゆらいでおりますよ。

「もうし隆秀さん、隆秀さんえ、出番でございます。ワープロの打ち疲れか、金魚の尻尾のゆらぐ夢の世界へ入られた隆秀さん。それならば、常盤津などは、と和子しやしゃり出ました。

「オヤ」と先生が悪い女をおつけるなりましたので、「悪」とは、昔は強いということ、昔悪七兵衛景清。

今、日本経済界始まって以来、御婦人方が推されて財界入りの快挙。なかにはファッション業界の方もいらつしゃつて、原宿の東郷神社へ持っていらつしゃつた秋元さん。さすが。

おもしろい、アハハにあおられて隆秀さん。パッと、人の世にはらはらと花散りかかる

本当は黙々と考えていらつしゃつたのではないかと秘かに疑いました。

にこにこさされていらつしゃつた奥様。相撲、常盤津と芸が過ぎた和子に頂門の一針。

二日灸して実年の女

明声

恐れ入りました。

(式田和子)

俳諧武玉川

のこと

杉江 杉亭

俳諧武玉川は江戸座俳諧の高点附句集で、初篇は寛延三年（一七五〇）に版行された。編者は慶紀逸である。

高点附句集でありながら前句を全く省略したところに「武玉川」の特色があり、これが当時の江戸人士の嗜好に投じた。好評裡に十五篇を出した紀逸は宝暦十二年（一七六二）に六十八歳で没した。

その後、明和八年（一七七二）に二世紀逸を名乗った四時楼英窓が十六篇を、安永元年（一七七二）に十七篇を出したが安永五年（一七七六）十八篇で中止となった。紀逸没後、明和二年（一七六五）に「俳風柳多留」が版行された。編者は呉陵軒可有である。前句附でありながら前句を省いたところに「俳風柳多留」の特色があるが、「武玉川」の響に倣ったと云えよう。

岩波文庫版「俳諧武玉川」を校訂された山澤英雄氏はその解説の中で「武玉川」は俳諧連句の付句集であり、俳諧連歌の平句の集といった趣もある。これに反し前句附は俳諧稽古の試みから発展したもので前句は必ず示されている。その前句を全く省いた前句附集『柳多留』でも前句附として前句は知ることが出来る。しかし「武玉

川」は前句を知るべくもなく、川柳文芸とは流れを異にするものである」と云っておられる。頼原退蔵氏も「雑俳前史」の中で「連句中の秀逸を抜書したかの『武玉川』と云われ、麻生磯次氏も「川柳雑俳の研究」の中で「武玉川は俳諧の集であり、柳多留は前句附の集である点両者は混同さるべきではない」と云っておられる。

さて、筆者が初めて「武玉川」に接したのは一九八二年二月に弥生書房発行の小島政二郎著「私の好きな川柳」であった。同書は川柳と銘打っているものの句の殆どは「武玉川」から集められ、軽妙洒脱な解説で「武玉川」の句が紹介されており、「武玉川」の中に当時の江戸人の知的な「遊び」の楽しさの一端に触れる思いがした。次いで、一九八四年一月同じ弥生書房より森銃三著「武玉川選釈」が発行された。著者は跋の中で「武玉川の句はその後の川柳と共に江戸の郷土文学として見るべきもので、世には川柳の面白さを解する人が多

いのに武玉川の句の忘れられてゐるのは、どういふものかといひたい。（中略）柳樽を讀みながら武玉川のあることを知らずにゐる人は、いまだ江戸文学を語るに足らぬ人

だといって置きたい」と。

そして一九八四年十月岩波文庫として「俳諧武玉川」(一)が刊行され一九八五年十月四巻目の発行で全四冊の完結をみたのである。そして、この四巻目には「俳諧武玉川」初篇より十八篇までの長句短句合せて全句の総索引が付されており、五十音別「武玉川」として読者の便を計っている点を付記する。

さて、以上「武玉川」の梗概と筆者の手許にある参考書の紹介を述べてきたが、次に現代連句にも充分通用し得る句を「武玉川」の特色である短句の中から筆者の興の趣くままに抄出して見よう。短句の下七語が三四若くは五二で結ばれている点にご注目ありたい。

意見のそばを通るぬき足 (初)
津浪の町の揃ふ命日 (〃)
取りつき易い顔へ相談 (〃)
祭が済んでもとの明店 (〃)
子守のもたれかゝる裏門 (〃)
入れ歯の工合噛みしめて見る (〃)
死んだ和尚を替める豆腐屋 (二)
肩へかけると活きる手拭 (〃)

しゃぼん玉の門を出て行く (〃)
向ふ木挽の揃ふ鼻息 (〃)
恋しい時は猫を抱き上げ (〃)
琴のうしろを防ぐ母親 (三)
今度も女伯母一人誉め (〃)
死にそこなうて辞世しなはず (〃)
呑みたい折に見えぬ丸薬 (〃)
気に入つたかと叩く仲人 (四)
抜いた大根で道を教へる (〃)
合せ鏡に三つある顔 (〃)
裸でよいと伯母がまた来る (五)
女房の留守も面白いもの (〃)
初午の日を狸うらやむ (五)
田町で見れば路次きりの海人さへ見ると死にたがる婆 (〃)
一人づつ子の戻る夕暮 (六)
娘の謎を伯母が来て解く (〃)
講中寄って替める成名 (〃)
金を欲しがらる雲の下人 (七)
丁字の句ふ六月の闇 (〃)
形見のぬれて届く五月雨 (〃)
腹の立つ時大針に縫ふ (八)
酒屋の禁酒心許なし (〃)
心に冬のちかき女房 (〃)
傘へ入れても損のない顔 (〃)

嵐の跡に響く鉄錠 (〃)
鹿に蹴らるゝ奈良の生酔ひ (〃)
鳶と言はれて酒を買う母 (九)
隠居へ孫をはこぶ雨の日 (〃)
親の昔を他人から聞く (十)
叱る親も叱られた果 (〃)
二度に時雨れる祇園清水 (十一)
砂利場で待つと手のひらへ書き (〃)
例える顔に困る仲人 (十二)
鯨鱈までをあぶながる母 (〃)

さて、叙上の抄出によって「武玉川」の一端を紹介したが、本稿の最後を前出「武玉川選釈」の森銃三氏の適切な文章で結ぶことにする。

「武玉川はおっとりした句が多く、その点好意の持たれるものが多い。難解の句の多いことは柳樽とも共通するが、難句は難句として強ひて解釈を試みようと思せず、解る句だけを味読するだけでも武玉川は愛読すべき書を成してゐる。よし十句の内、九句までは解らなくとも、ただ一句だけでも解る句の出で来ることに依って、武玉川は私等の傍に愛読するに堪へる書となつてくれる」。

絶頂の城

付勝練習歌仙

東明雅

投句締切 4月20日

親が居て子が居て電話ままならず

ばりばりと炒るちぎり茸蕪

角乗りを終へて後師まづ一献

十二句目

治定 江悠々と冬靄の中

1 風邪ひき猫がじっと見上ぐる

2 ころがってくる木枯しの箎

3 背中て睨む龍の彫り物

4 セーター寛斎コートケンゾー

5 路地ながし行く物売りの声

6 ちよろりと猫が表横切り

7 路次の奥まで虎落笛吠え

8 遠野の話雪催ひして

9 ビデオに残る名人の芸

10 段々畑蜜柑色づく

11 宇宙の規模の雪の塊

12 張子の虎が棚で首振る

妙子

千町

杉亭

天留子

美保

采女

杉亭

千町

力

遊

隆秀

妙子

美子

清之

昌子

貞子

13 雲のかたちのいつかかはりて
14 パート勤めへ急ぐ主婦たち
15 かじかむ猫のあちらこちらに
16 薄氷して犬も拔足

17 寒の雀が縁近く来る

18 灯のつきそめしマンションの窓

19 すたすたと行く寒行の列

20 湯気の雫のぼたばたと垂れ

21 振りむきもせず過る豆腐屋

22 やらせテレビがまたやって来て

紅於
治定の句、作者の言葉を紹介すると、「気分を一転して、ゆったりとした大景の心地です。今まで外国の句なく、これは楊子江の後の景の連想にて、一家こぞって一年も二年も筏の旅をする由、その中には老酒の盃を傾けている好々爺も居ることでしょう。冬の場の句として見ました。」なるほど、この句を付ければ、今までの苛々した気分が一転することは言うまでもない。前句には近すぎるけれども、深川の木場あたりの景を中国に見立替えたものとするれば、それもまたおもしろいのではないかと思つた。ただ、次句に月を出さねばならぬのに、冬靄とまで言われては、これもちょっと困るのであるが、賢明な皆さんが何とかして下さるだろう。これも修練の一つと、敢えて無修正でいたした。よろしく願ひする次第である。

次の1の猫は、前回から何とかして出そうと努力されてゐる。(○号参照)、何でこんなに猫に魅力があるのか、ま

さか、猫養会だからでもないだろう。でも、この猫は付味も悪くないし、転じも十分である。2は前句への付味はすごくよいが、残念ながら打越の気分からの転じが十分でない。何かまだ苛々した気分が残っているようだ。3は前句の会釈だが、後師に彫り物ではやや月並ではないか。その点、4のハイカラな服装の方がかえって似合い、転じも悪くない。5は向付であるが前句に対してはすこし平凡ではなからうか。もっと具体性が欲しかった。6の猫は軽快である。しかも、この辺の留めがみな名詞留めになっているのを避けて、字止めにされた苦心も分かる。そう言えば1の猫もそうだった。7は前句への付味はよいが、やはり転じがない。虎落笛の中でばりばりと茸蕪を炒られる身にもなつてもらいたいところだ。8 遠野の話は角乗りとどんな関係にあるのか寡聞で知らないが、ちょっと付味がよくないのではないか。9のビデオで見た景を付けるのも感銘が薄い。この方は別に「風吹きぬける冬の満月」という句も出しておられるが、その方がむしろよかつた。10の段々畑は角乗りの前句と付味がよくない。打越からの転じがよいので教われている。11はお葉書によれば「ハレー彗星の丸い部分の実体は雪」とのこと、角乗りの危うさから付けられた由であるが、こんなことを皆さん御存知だろうか。あるいは知らないのは私ばかりかも知れないが、そう説明されてもピンと来ないのだから救いようがないとあきらめて下さい。12寅年にちなんで張子の四つ足を考えられたとのことだが、これは付味も転じも悪くない。13この句は前句

との付味は悪くない。角乗りに夢中になつてゐるうちに天気が変わり、雲行きがあやしくなつたというのはおもしろい。しかし、次か、その次か月に月を持って来なければならぬことを考えると、いささかしんどいのである。14向い付の手法、角乗りを横目に職場へ急ぐ主婦の姿、これは付味はよいが、打越が主婦の台所で働いている姿なので、その点、転じがいかかであるか。15この猫も可愛そうだが前句への付味がいかか、転じは感じられる。16も15に似てゐる。ただ、この16の犬の方が何か具体性が感じられる。17もさり気ない句だが、よく味わえればしおりのある句だが、地味な句である。18は付味は悪くないが、ちぎり茸蕪はどうせマンションの灯の下を想像させるから、その点転じがないと言えは言える。19いさましい角乗りに厳肅な寒行を向付にしたもの、同じ向付でもこれはおもしろい。付味も転じもよいと思う。20角乗りをした人の会釈の句だが、ただそれだけという感じ。茸蕪を炒る人も汗を流してゐると見れば転じもない。21は19と同じ向い付だが、豆腐屋と寒行ではやはり格が違う。豆腐は茸蕪の打越であるが、寒行は釈教という新しい世界を出した。このような点が考えねばならぬところである。22時事の句めいてちよつとおもしろいが、付味・転じ、ともに不十分である。さて次の裏の七句目、前句に冬が出たので、何とか冬の月を出していただきたい。打越が人情他だから、それ以外なら何